

第三章 信仰のめざめ

正芳が学んだ高松高等商業学校（現香川大学経済学部）は、原敬内閣の高等教育機関拡大の方針に基づいて、大正十三年（一九二四年）に設立された。錚々たる教授陣のもとで、将来有為な士魂商才の実業家の育成という目的に向かって邁進中であり、正芳が入学した前年によく第一回卒業生を出したばかりの新しい学校であった。

「私が入学した昭和三年（一九二八年）といえば、ちょうどはなやかであった大正デモクラシーの風潮が漸く色褪せてきたし、昭和二年の金融恐慌の余波も手伝って、明るい展望がみえない何かしら重った感じのする時代であったように思われます。それでも校内にはまだロマンチックな雰囲気が涵れていたわけではなく、南国の明るい甘美な自然と相俟って、自由に闊達な学園生活を楽しむことができました」と大平はのちに書いています。

高松高等商業学校への入学は、十八歳の正芳にとって、ある意味では、家庭の束縛からの離脱であった。寄宿先の叔母ヨシ（母サクの妹）の家は、東讃、大川郡の津田という海浜の町で、通学には汽車で一時間ほどかかったが、それまで学業以外のほとんどの時間を野良仕事や副業に占拠されていた正芳は、はじめて自分自身の勉学と思索に専念できる時間を持つことになった。

そういふ彼に、或る日雷鳴が轟き、稲妻が思つてもみなかつた世界を照射した。それは、正芳の入学後間もない昭和三年四月、一人の宗教家が来高し、講演を行った時にはじまる。宗教家の名前は佐藤定吉（当時東北帝国大学教授）、演題は「科学と宗教」であつた。

佐藤定吉は徳島の人。京都の第三高等学校の理科に進んだ。ここで片山哲（のち日本社会党委員長、内閣総理大臣）らの友人を得てYMCAに入り、キリスト教に近づいたのち、東京帝国大学工科大学応用化学科に入り、大学卒業の折には、恩賜の銀時計を拝受したという英才である。その後米国へ留学、大正八年（一九一九年）には、東北帝大在職のまま東京・下落合に「佐藤工業研究所」をつくり、ここで大豆蛋白の合成樹脂を發明して、「サトウライト」と名付けた。プラスチックの草分けである。

佐藤は大正十年頃から、日本救世軍の山村軍平を助けてキリスト教の伝道を始めるが、五女が疫癘に罹つて死去したのを機に、召命を受け、全国の高高等学校および大学の学生の中へ飛びこんで、学生に伝道を始めた。昭和二年（一九二七年）には佐藤を中心とする「イエスの僕会」が設立され、東京をはじめ全国各地にその支部ができ、同年八月には第一回修養会が浅間山麓で開催された。

正芳が佐藤定吉に出会つた昭和三年は、日本の政治と経済の転換期でもあつた。この年二月に普通選挙法による最初の総選挙が行われ、民主主義と政党政治は大きく前進したようにみえた。しかし、昭和二年には金融恐慌が発生して、日本経済は深刻な危機に直面していた。陰鬱な雰囲気日本社会を蔽つた。マルクス主義が若い学生たちの間に流行し、やがて共産党関係者への大弾圧（三・一五事件や四・一六事件）へと進んで行く。

こうした時代の趨勢は、若い学生たちが佐藤定吉の主唱するような運動を支持する原因の一つともなつていた。事実、この時期には、厳しい取締りや運動の行詰りなどにより、マルクス主義に挫折した若者たちが、数々の修養団に、その悩みの解決を求める例が少なくなかつた。

こうした青年たちに対する佐藤の講演内容は多岐にわたっているが、大別すると、一つは、物質文化偏重の時代趨勢を戒めて宗教と科学の高次元における統一を説いたもの、もう一つは、イエスを媒介とする神体験を説いたものである。前者に属する彼の演説の特徴は、その焦点を、当時の日本文明のあり方そのものに求めるところにあった。佐藤の講演は舌端から火を噴くというのがふさわしいほど激しいものであった。学生たちの中には、講演が終わると演壇に駆けあがって、佐藤の手をつかみ、涙滂沱しながら、その門下に加えられることを願うものもいたという。佐藤には一種のカリスマ的な魅力がそなわっていたのであろう。

この一連の講演は、昭和の暗い時代にさしかかって悶々としていた当時の青年たちの、きわめて大きい共感を呼ぶものとなった。後年の大平正芳の思想にも、この佐藤の考えの片鱗を窺うことができる。

佐藤は、若き共鳴者たちにむかって、没我の心で神と合一することを説いた。共鳴者の数が多く、その力が強くなればなるほど、理想の国日本が実現される、というのがその教理であった。そのため使徒を佐藤は学生に求め、その使徒に対して大衆に訴えかけることを要請したのである。

前年に父の死を経験し、厳しい生活環境の中から笈を負って出てきて、都会高松の刺激に満ちた新しい環境の中で、それまでおよそ思想とか宗教とかに触れる機会がなかった十八歳の正芳は、魅せられたように、この佐藤の噴きだす弁舌の嵐にまきこまれた。そして、少なからぬ学生たちとともに佐藤の門をたたき「使徒」の一人となることに意を決した。「野戦」と呼ばれた路傍伝道に、十字架の印のついた提灯を持って参加し、自ら街頭でイエスの導きを説くようにもなった。また休みの日には、同じくイエスの僕会の会員の宿に集まり、互いに人生や神について語りつつ、祈禱や信仰告白を行うようにもなった。仲間の一人はこう回想している。

「祈禱会は、自分の精神的な悩みや家庭的な悩みなどを告白して、最後には神さまにお願するというかたちでした。大平さんは一番熱心で、涙を流しながら告白していました。神の前に謙虚に、幼子のようにへ

りくだるのが一番大事だと、当時われわれは考えていましたから、感謝して涙を流すのは自然なことでした”。
正芳がどれほどこの運動に打ち込んだかは、はじめて佐藤の講演を聞いた直後の夏に、浅間山麓千ヶ滝の山荘で開かれたイエスの僕会第二回修養会に参加したことから想像がつく。

さらに正芳はその年の十二月二日、東京・青山会館で開かれた一般市民を対象とする大伝道講演会に参加するため、高松からはるばる上京して、「紋付き羽織はかまといういでたちで熱弁をふるった”。

ところで、イエスの僕会の組織では、この会の趣旨に賛同して、そのために奉仕することを決意したものを「決心者」と呼び、これが同会の会員となる。会員の本質は一種の大衆運動家であって、必ずしも普通の意味でのキリスト者であるわけではなかった。

「……佐藤先生の所説は、われわれに神に対する畏れの念を植えつけるには役立つが、その神がなぜ「愛」かについては、どうしても納得のゆくものではなかった。そのためには、キリスト教の教えをまたねばならなかった。したがって僕会の人々も、その後キリスト者としての道を歩んだ人が多く、先生の科学と宗教についての論説は、キリスト教への呼び水の役割を果たしたものだ」。

私の場合も、その後聖書を通してキリスト教に進んだ」と、正芳は記す。

しかし、正芳にとって、このキリスト教との出会いは他の多くの学生とちがって、政治的なものではなかったであろう。父の死をはじめさまざまな家庭的不幸に見舞われていた正芳にとって、それは、思想的、宗教的に初めての啓示体験であった。だからこそ、異常と思われるほどの情熱をもって、彼はこの運動に献身したものと思われる。

正芳は、高松高商二年の年（昭和四年）の夏、軽い湿性肋膜炎にかかり、しばらくの間微熱がつづいた。

「そのころ私は、どうしたものか、社会科学を学校で学ぶこと自体に興味を失いかけていた。たまたま病を得たので、強いて休学しなければならぬほどの病状ではなかったが、思い切って休学を決意し、療養かたがた学校を続けるべきかどうか、今後の進路を考えてみることにした。幸い母も兄も、私のわがままを何とも言わないで許してくれた。

休学中、私は毎日のように、近くの山に登ることを日課としていた。肋膜炎は幸いに快方に向かった。その間、漱石の小説を読んだり、内村鑑三先生の著作に親しむことができた」。

この文章だけでは、正芳の悩みの内容が何であったか、またそれがどれほど深刻なものであったのかはよくわからない。だが、自分でも全く思いもかけずに、熱烈なキリスト教運動家となったしまった若者が、それまで考えていた人生進路や信じていた価値観を大きく動揺させたとしても、これはごく当然のことと言えるであろう。

友人たちの話から察すると、彼はこの時期、キリスト教関係の本ばかりでなく、哲学や詩やエッセイをむさぼるように読んだ。特定の友人たちには、思索を交流する手紙を書き送った。哲学のことが書いてあったり、英語がたくさん使われていたりしていたという。

正芳が洗礼を受けたのは、この年の暮のことだった。受洗に関する書類を見ると、昭和四年十二月二十二日に、志願書を日本基督三豊教会に提出し、同二十七日、観音寺教会で、プカナン牧師により受洗されたとなっている。

昭和五年春、正芳は「転学の決心も、退学の決意もつかないまま」復学した。二回目の二年生である。このとき同じクラスになった一人の友人は、こう記している。

「学生時代の彼は、幹事になって、他の連中が言うことを聞かないと、自分の誠意が足りないと言って泣

きだすくらい純情で、律義と献身の託身のような人間だった。……彼と私とは、性格が相反するほどでもないが、かなり違っていた。このためかえてお互い間に倦みのない長い交流関係が続いたのかも知れない。……若い時代、お互いに取交わしたやや心情的だが客気の多い書翰は夥しい数に上るが、彼の手紙は惜しくも戦災で全部灰になってしまった。

手紙の内容は、到るところにカントやショーペンハウエル、ニーチェが出てくる、聞きかじりのペダントイックなものだったという。

ただ、ここで不思議なのは、それほど親しかったこの友人に対して、正芳がイエスの僕会における自分の活動について、一切告げていないということである。この友人は「僕が無神論者なので、神の話をしても仕方がないと思ったからではないか」と言う。しかし、毎夜のように街頭で伝道活動を行い、涙を流しながら信仰告白する多感な青年が、哲学や愛を語り合う親しい友人に、仮に相手が無神論者だと思ったところで、自分の信仰や伝道活動について口ばしらないということがあるものだろうか。もしあったとしたら、それは、無類のシャイな精神が強い意志の力かによるものであろう。いずれにしてもそれは、前章で触れた正芳の自己抑制力と無縁ではないと思われる。

因みに、この当時、正芳の家族も、彼がそのような活動を行っていることは全く知らなかった。

また、ここで注目してよいのは、正芳がまだ学生の身でありながら、イエスの僕会の一人の先輩のために、結婚のあつせんのお勞をとったということである。この結婚話は、正芳が間に立って苦勞した結果、二年のうちに成就した。正芳の仲立ちで結婚したこの人は、「その間、大平さんはいつも影のごとく私どもの後楯となってくれました」と語っている。正芳の母サクも、交際家で、しばしば結婚話をあちこちに持ちこんで世話をやいていたというが、正芳はその血をもひいていたのかもしれない。

しかし、学友の多くは、正芳のこういう面を全く知らず、彼は、小中学生時代と同じように、学内においては相変らず目立たぬ存在でありつづけた。

病氣療養を終えて高商の二年に復学した時、正芳は、津田の叔母の家から高松市内に下宿を移していたが、三年に進級するにあたって、イエスの僕会に学外から協力者として参加していたクリスチャンの一人の家に下宿した。

正芳が三年に進級した昭和六年（一九三一年）には、日本の経済は異常な困難のまっただ中であつた。すなわち、その前々年の一九二九年十月二十四日には、ニューヨークのウォール街で「暗黒の木曜日」と言われた株価の大暴落が発生し、これに端を発した大恐慌の波が世界をおおうにいたつた。国際収支の赤字を解決し、為替相場を安定させるため、緊縮財政、金解禁という政策によって切り抜けようとしていた日本は、この世界恐慌の衝撃によって、深刻な危機に陥つた。いわゆる昭和恐慌である。正貨は際限なく海外に流出し、昭和五年の物価は前年比約一八パーセントの暴落、輸出の減退は三四パーセントに及んだ。昭和六年になつても事態は一向に改善されず、物価は前年比一六パーセント減、輸出も二〇パーセント低下した。不況はますます深刻化して、企業倒産があいつぎ、農村の疲弊は筆舌に尽しがたいものがあつた。

正芳の同世代の学生たちは、このような環境の中で、自分の針路を決めなければならなかつた。

大平自身の文章によると、「私はつとに大学進学を決意し、家族に内証で一橋に入学志望の手続きをとつておいた。ところが、母は進学などは夢にも思っていない様子で、自ら出向いて同じ村の先輩で、当時「四国水力」の専務をしていた田中隆氏に、私の採用方をお願いしてあつた。しかし世の中はたいへん不況で、同社としても、その年は新規採用を見合わせるということが、卒業間際になつてはつきりした。進学の希望を打ち明けるべきかどうか、躊躇しているうちに時間は経過して、私はついに、進学と就職の双方の機会を共

に逸してしまった。そうこうしている矢先、『イエスの僕会』を通して知遇を得ていた大阪の桃谷勤三郎氏から、私は一つの勸奨をうけた。

それは『佐藤定吉博士の発明にかかる薬品を企業化し、その収益でキリスト教の伝道の資にしたい。できれば、その仕事に参加しないか』というものであった。私は……、喜んでその勸奨に応ずることにし、卒業とともに上阪した。

桃谷勤三郎は、大阪に桃谷順天館なる化粧品会社を経営していた実業家で、キリスト教徒として、資金その他の面で佐藤定吉博士のかけがえのないパトロンとなっていた。

昭和六年夏、桃谷は、ある目論見を抱いてイエスの僕会の第五回浅間山麓修養会に参加した。桃谷は当時、さきの大平の文章にもあつたように、佐藤定吉から、彼の創製した銀コロイドを主原料とするシルバースルという薬品を大衆化して桃谷順天館から発売し、その利益を学生伝道に寄贈してほしいとの申入れを受け、この提案を受け入れることにしていたので、できればこの修養会に集まった学生の中から、一、二名を社員に採用したいと考えていたのである。

桃谷が、正芳と顔をあわせたのはこれが最初であった。桃谷は、修養会の四、五日間に、旧帝大はじめ官立高等学校の学生たち四十人ほどを観察したが、やがて正芳に目をつけた。

「大平さんは始め無口であまり目立たない存在であつたが、ここという時には機を逸せず発言し、雄弁ではないが的を射た発言をした。そこで私は、大平さんに、新薬品発売の企画を話して桃谷への入社を勧めたところ、大平青年は快諾して、翌七年春、卒業と共に来阪、帝塚山の私の家から、桃谷順天館に通われることになった。」

こうして昭和七年（一九三二年）三月、正芳は高松高商を卒業した。在学中の彼の成績などについては、高松高商が昭和二十年（一九四五年）七月の空襲で全焼したため詳しくはわからない。わずかに残っている

のは、翌昭和八年春、正芳が東京商大を受験したさいに、高松高商が商大の求めに応じて提出した「調査書」だけであるが、その中に、学校側の記述として、正芳を、「宗教的信念強シ」と評していることは注目される。

正芳は桃谷の屋敷を仮事務所として仕事に取りかかったが、佐藤が発明したこの薬品は、手や顔につけると色が真黒くなって、売物にならず、佐藤は金コロイドによる新しい製品の開発を約束した。正芳は、「その間の閑暇を利用して、ナツシユの『黄金律』の翻訳をしたりして、二、三カ月の間、桃谷家の食客をしていた」。ナツシユはアメリカの洋服商で、マタイ伝七章十二節の「凡て人にせられんと思ふことは、人にも亦その如くせよ」という律法おきて(黄金律)を守って成功したという人物である。正芳の訳したのは、このナツシユの自叙伝であつた。

新薬はなかなか商品化されず、伝道事業のために一生懸命働こうとしていた正芳は、出端をくじかれたかたちとなつた。彼は桃谷家から会社近くの寮に移り、広告部に属して外国の雑誌や広告文を翻訳したり、月一回の聖書研究会で世話役をつとめたりしながら、新薬品の完成をあてどなく待つことになつた。

当時の正芳の心境をあらわす手紙の一つに、この夏、高商時代の僕会仲間の一人に宛てられたものがある。

「……………御承知の如く、小生も、全く予想せざる急角度の運命の開展により、煙都の一隅に細々した数字と統計に玉の汗かく自分を見出しています。

……………常に真面目に人生を眺めつつ……………」との御ほめの御言葉には恐縮します。真面目になりきれず、勝手なる許りを追求していますので、常になやんでいます。このなまぬい胸の血潮の中に一脈の生命が是非ほしいものと、祈り求めています。とまれ、四角四面の冷たき論理の世界、象牙の塔の花園より永遠に放逐されしものです。『凡そ理論は灰色なり』とのメフィストの言葉を待つまでもなく、灰色の論理と角ばつたへ

リクツには用事はないはずで、出来るだけ事実には忠実に、大地の黙々たる嚴かなる歩みに耳を傾けつつ、事実の論理に肉をつけつつ、歩ましていただきたいと心懸けています……」。

当時の青年の文章がとかく感傷過多であるということを割り引くとしても、『四角四面の冷たき論理の世界、象牙の塔の花園より永遠に放逐されしものです』と大学への進学は完全に諦めたことが表明され、手紙全体に感じられる憂鬱さは、明らかに自分の昨年の夏の決断が誤りだと知ったことを物語っている。新業はついに開発されぬまま、正芳は秋を過ぎさなければならなかった。正芳は、もう一度学窓に帰って再起を図ることを決意した。

「もとより、私の家の家計は、私を大学に進学させるほどの余裕はなかったため、入学とともに、坂出市の鎌田共済会と、高松市の香川県育英会の双方から学資の貸与をうけることになり、両法人の好意で私の大学生活は始まったわけである。鎌田共済会は坂出市の鎌田家、香川県育英会は高松市の松平伯爵家の好意によってできた財団法人で、香川県の多くの人材が、この両財団によって進学のお機に恵まれた。私もその仲間に入れて頂いたことは、何としてもありがたいことであつた」。

こうして、正芳の大阪時代に終止符が打たれ、東京での新しい大学生活がはじまつた。

それにしても、故郷を離れて、高松高商に入学して以来、大阪を出るまでの五年間は、正芳にとつてどのような時代だったのであろうか。大平は、社会人になつてから、間もなく、高松高商の同窓会誌に寄せた文章で当時をこう回想している。

「昭和三年から五、六年頃にかけて母校に在学せし諸君は『イエス僕会』なる団体の果敢な活動を記憶されてゐると思ふ。それは当時全国の大学高専を遊説されて多数の共鳴者を獲ち得た工学博士佐藤定吉氏の自然科学宗教観に魅了せられた一群の学生の結社で、既成のYMCAの萎靡沈滞に対する反動も手伝つて

或は校庭に或は街頭にこの群独特の清澄な動きを展開してゐた。成程初期に於ては運動の焦点の見定めがつかず綱領自体に清算さるべきものもあつたので何かしら地につかない突飛な相貌を呈してゐたかも知れない。或は当時の学生層に喰入つてゐた一般的不安をかう言つた側面から発散させようとする一つのもがきとして一般に受取られてゐたかも知れない。しかしともかくこの群は一つの異様なセンセーションを校の内外に捲き起し相当優秀な学生の多くを自己の陣営に迎へてゐた。そして彼等は抑へ難い内面的闘争と清算の過程を辿つて或者は基督教の正統に導かれ或者はこれを捨てて行つた。

大平自身は「正統に導かれたもの」か、あるいは「これを捨てたもの」か、この文章ではどちらとも明らかにされてはいない。しかし、その後を見ると、彼は、聖書に親しんだ形跡は窺われるにせよ、キリスト者としての自らを強調したこともなく、ましてや伝道の拳に出たこともなかつた。そういう点からするなら、おそらく右の一文は「イエスの僕会」に熱中した若き日の自分への訣別の言葉であつたのであろう。